待ちの姿勢を打開して販路開拓へ。父娘が挑んだ新たな店の第一歩

支援テーマ
創 経 地 農 販
海 再 承 も 雇
資 持 IT

課題　顧客が高齢化し、若者の客も増えない

「東京の奥座敷」などともいわれ、豊かな自然が残る日の出町。ここで1964年に菓子製造小売業として創業したのが、幸神堂である。町在住の比較的年齢層の高い顧客を中心に、地域に密着した営業を続けてきた。

こだわりは、北海道産小豆を100％使用した自家製あん。「ロンヤス饅頭」や「山荘最中」は、1983年に日の出山荘で行われた当時の中曽根康弘首相とレーガン大統領の日米首脳会談にちなんで誕生した銘菓で、今も店の看板商品だ。また自慢のあんを使った和菓子のほか、季節の菓子や、パイ生地の洋風菓子なども販売している。現在は、経営者と、販売スタッフを務める妻を中心に店を切り盛りしている。

しかし、少子高齢化や若者の和菓子離れなどを背景に、既存顧客の平均年齢が上昇傾向にあり、若者層の客が増えないという課題を抱えていた。

しかも、ここ数年、新商品の開発・販売もできておらず、新たな販路開拓の取り組みもしていない。このままでは、いずれジリ貧になる可能性がある。そんな漠然とした不安を抱えていた経営者だったが、具体的な対策を立てるきっかけもつかめずにいた。そこで、支援に乗り出したのが、日の出町商工会だった。

支援　父娘の共同プロジェクトで事業承継にも道筋

相談を受けた商工会は、さっそく同店のヒアリングを開始。店の現状分析などを行った。

そして、今までの「待ちの姿勢」を打開して、新規顧客を獲得すべく積極的な販路開拓を行うため、２年間の事業計画の策定を提案。ポイントは、販売スタッフの長女を広報責任者として経営に参画させることだった。

こうして策定した父娘の共同プロジェクトによる事業計画の具体的な内容は、長女がデザインしたイメージキャラクターの看板を店頭に設置、自社製品が多くの町民の目に触れるための流通網の構築、町内の高齢者施設の入居者の来店促進、さらに、町内の小学校での和菓子教室の開催などである。

商工会では、その実行支援も行い、経営者は「物事の優先順位が明確になった」「仕事に追われるのではなく、追いかけられるようになった」と事業計画策定と取り組み内容の効果を実感。また、事業承継への道筋も見えてきた。

幸神堂の店舗

支援の経過

期間	支援内容
2017年8月～10月	ヒアリング、分析、検討
11月	事業計画（２年間）の策定支援
2017年12月～2019年8月	事業計画の実行支援

会社概要

会社名：幸神堂
住所：東京都西多摩郡日の出町大久野1177
電話番号：042-597-0265
URL：https://ko-shindo.jimdofree.com/
代表者名：沼田真一郎
創業年：1964年
従業員数：３名
商工会名・担当者名：日の出町商工会・福島茂